

『一房の葡萄』

「君はジムの絵具を持ってきているだろう。ここに出し給え」

そういつてその生徒は僕の前に大きく拵げた手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない」と、ついであらめをいってしまいました。そうすると三、四人の友達と一緒に僕の側に来っていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失くってはいなかったんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くっていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか」と少し言葉を震わしながら言いかえました。

僕はもう駄目だと思つたと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤になったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢でとても叶いません。僕のポケットの中からは、見る見るマール球（今のビー球のことです）や鉛のメンコなどと一緒に、二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして、子供たちは憎らしそうに僕の顔を睨みつけました。僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗になるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からおれしてしまいました。あんなことをなせしてしまったんだろう。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だった僕は淋しく悲しくなつて来て、しくしくと泣き出してしまいました。